

20) 胆嚢癌術後の肺塞栓症に対し ECMO 補助後、塞栓除去術を施行した1例

中山 卓・渡辺 健寛
 名村 理・菅原 正明
 斉藤 憲・林 純一
 江口 昭治 (新潟大学第二外科)

症例は61歳、女性。胆嚢癌手術後5日目、急に subshock 及び低酸素血症となり、精査にて肺塞栓症と診断された。呼吸状態が悪化し、また著明な LOS であったため V-A ECMO を導入した。その後も保存的治療に反応なく、ECMO 開始後4日目に人工心肺下にて塞栓除去術を行い、術後4日目に ECMO より離脱可能であった。その後膿胸、創部感染等出現し、管理に難渋したが、胆嚢癌手術後約5ヶ月目に退院した。

本例は早期に ECMO を導入し、手術までの循環・呼吸を維持したこと、また術後の高ビリルビン血症に対する吸着療法等の積極的治療により、良い結果が得られたものと思われた。

21) 手術室搬送前に血圧低下をきたした為 ICU で Aortic Occlusion Balloon を挿入し救命された腹部大動脈瘤破裂の2手術例

平原 浩幸・山崎 芳彦
 金沢 宏・上野 光夫 (新潟市民病院)
 青木英一郎 (心臓血管外科)
 高橋 善樹・八木 伸夫 (新潟大学第二外科)

腹部大動脈瘤破裂では、手術を準備している間に出血性ショックとなり、手術に至らない症例も多い。手術準備のため ICU で待機中に血圧低下をきたし、左腋窩動脈より Fogarty Aortic Occlusion Balloon Catheter を挿入し、血圧を維持しながら手術に向かい救命された2症例を報告する。Balloon の拡張量は血圧が維持できる最少量とし、末梢側に少しでも血液が流れるように配慮した。Balloon による occlusion time は症例1は約 45 min、症例2は約 75 min であり、術後非乏尿性の急性腎不全になったが、透析せずに腎機能回復し元気に退院できた。

22) 三尖弁位の Stuck valve に対し右開胸により再弁置換した1例

男澤 弘・中沢 聡
 八木 伸夫・保坂 淳
 小熊 文昭・入沢 敬夫 (立川総合病院)
 春谷 重孝 (循環器センター)
 (心臓血管外科)

49歳女性。Epstein Anomaly の診断で29歳時に ASD

直接閉鎖術、48歳時に Carbomedics 弁による三尖弁置換術を施行された。今回、外来経過観察中に乏尿、肝腫大が出現して入院、X線透視で機械弁の stuck を確認した。ウロキナーゼ投与で一時的に弁可動性の改善を認めたが、再び stuck し再弁置換術を施行した。手術は右開胸で右房に到達、完全体外循環とし心拍動下に右房切開、生体弁を用い再弁置換した。視野は良好で手術時間は3時間15分、術後は順調に経過した。Carbomedics 弁は hinge に Wash Out 機構を有するが、その hinge に形成された血栓が stuck の原因であった。

23) 組織所見からみた当院における急性虫垂炎手術症例の検討

平野謙一郎・関矢 忠愛
 斉藤 六温・吉田 正弘 (刈羽郡総合病院)
 杉本不二雄 (外科)

当院における虫垂切除症例に対し組織学的炎症程度による分析とその中の炎症軽度例を術前に手術適応から除外する鑑別点の有無についての検討をおこなった。1994年4月1日から1996年8月31日までに当院における虫垂切除及び組織検索提出例103例を対象とした。組織学的炎症程度の内訳は、103例中 normal: 19例 (18.4%)、catarrhal: 2例 (2.0%)、phlegmonous: 68例 (66.0%)、gangrenous: 14例 (13.6%) だった。術前所見では白血球数と CRP が phlegmonous 以上の群で有意に高値だった。また、上腹部痛が初発症状であった症例も phlegmonous 以上の群で有意に多数だった。一方、体温、腹膜刺激症状の有無については両群間で有意差は認められず、保存的治療も可能であったと推定された20%の症例を術前に診断することは困難であると思われた。しかし組織学的に normal な虫垂は臨床的にも normal といえるのかどうかは今後の検討課題といえる。

24) がん検診における全大腸内視鏡検査の成績

三浦 宏二 (がん検診クリニック)
 (三浦外科)

1) 人間ドック被験者、2) 便潜血陽性者、3) 便通異常者(血便を除く)、計455例(平均年齢52.5歳)に行った TCF の成績を報告する。

腫瘍性病変は、腺腫142例(31.6%)、癌11例(2.4%)、carcinoid 2例(0.4%)、平滑筋腫2例(0.4%)であり、癌の発見率は便潜血による一般の報告(0.15%~0.2%)よりもかなり高率であった。10例がm癌、1例が進

行癌であり、早期癌の平均年齢は51歳で、5人が40歳台であった。便潜血陽性者は11例中4例のみであった。局在は、直腸3例、S状結腸4例、横行結腸2例、上行結腸1例、盲腸1例で、4例(37%)は右側結腸であった。

40歳以上の成人は、便潜血検査の結果にかかわらず、一度はTCFを受けることが望ましいと考えられる。

25) 盲腸癌術後孤立性脾転移の1例

松本 春信・山井 健介
 小山俊太郎・多田 哲也
 有本 直樹 (立川総合病院外科)

結腸癌の脾臓転移は稀であり、症例の報告も少ない。今回、盲腸癌術後の脾臓単孤立性転移症例を経験したので報告する。症例は74歳男性で、平成6年11月に盲腸癌にて右半結腸切除術を施行した。高分化腺癌でse, n₂(+), Po, Ho, M(-)であった。術後経過は良好だったが、平成8年6月CEA値が13.5と上昇し、US, CT, MRI, 血管造影にて転移性脾腫瘍と診断された。9月20日手術を施行したが、脾尾部にわずかに直接浸潤が認められたため、脾尾部切除を合併した脾摘除術を行った。肝、腹膜、リンパ節には転移はなく、脾臓単独への孤立性転移であった。転移巣は6.5×5.0×4.3cmで黄白色、充実性であった。病理組織学的には高分化腺癌で、既往の盲腸癌の転移と考えられた。文献的考察を加え、症例報告する。

26) 当院における大腸癌手術症例の検討

太田 一寿 (太田総合病院
 附属太田記念
 病院外科)

1987年より約10年間で820症例の大腸癌の手術を行った。この820症例830病変について検討を行った。

〈結果〉

①ここ2年間は100例以上の手術を行っており、年々増加している。

②男性にやや多く、60代、70代、50代が多かった。

③約80%の症例に根治手術が行われた。

④肉眼型では2型が、組織型では高分化腺癌が、深達度ではal・ssが多かった。

⑤潰瘍性大腸炎の癌化例が1例、ポリポースの癌化例が6例みられた。

⑥穿孔例の約80%は左側結腸で、約60%が人工肛門を

造設した。

⑦追加切除症例の約30%に癌が認められた。

⑧若年者高齢者では、予後の悪い症例が多かった。

27) Fournier's gangrene の3例

津田 祐子・阿部 要一 (新潟医療生活協同)
 山田 明・新保 雅宏 (組合木戸病院外科)

われわれは1994年4月より1996年9月までに、Fournier's gangrene と考えられる陰部周辺の急性感染性壊疽の3例を経験した。いずれも肛門周囲に膿瘍を認め、1例は大腿部から腹壁に、1例は大腿部背側に、1例は陰嚢内に急速な拡大をみせた。CT施行の2例では、病変部の皮下から筋層にガス像を認めた。膿瘍部切開排膿、ドレナージ、抗菌剤投与を行い、2例は軽快したが、入院時既にショック状態に陥っていた1例は、DICから多臓器不全により死亡した。Fournier's gangrene は急激な増悪をきたしやすいため、陰部周囲膿瘍の症例では本症を念頭においた早期診断早期治療が重要であると思われた。

28) mesh による鼠径・大腿ヘルニア修復術の比較

川上 一岳・大谷 哲也 (日本歯科大学)
 早見 守仁・吉田 奎介 (新潟歯学部外科)
 川合 千尋 (消化器科・外科)
 川合クリニック)

当科で1992年5月～1996年10月までに施行した腹腔鏡下ヘルニア修復術(以下LH)群49例と従来のアプローチによるメッシュプラグを用いた修復術(以下MH)群8例とについて比較検討した。

LH群は男41例、女8例で、年齢は35～82(平均63.1)歳、MH群は8例全例が男で、年齢は61～85(平均74.8)歳であった。LH群は全例が全麻下に行われ、手術時間は平均1時間28分(両側例を除く)、MH群は腰麻下4例、局麻下4例で手術時間は平均46分であった。両群ともに術直後を除いて全く鎮痛を要せず、術後入院期間はLH群3.9日、MH群4.9日であった。その他、術後合併症の有無や麻酔時間、抗生剤の使用などについても検討した。